
意外な人の恋愛

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意外な人の恋愛

【Nコード】

N5271Z

【作者名】

餓鬼

【あらすじ】

俺の名は姫条悠里きじょうゆうりは親の勝手な都合により婚約者を決められたその相手は白皇学院に通っているらしい。そんな物、俺には関係がなと思っていたが……あの日、俺が見たことによって俺は彼女に惹かれていった。

駄文ですがよろしくお願いします

プロローグ（前書き）

勢いでやってしまった！ てか、新刊にっていた映画を見て思い
ついた。

ブローグ

ある日俺は親からいきなり言われた。

「実はね、悠里君には婚約者が居まーす」

「へっ！」

学校から帰ってきたらそんな事を言われた。

「冗談はその妖怪じみた顔だけにしてくれよ」

冗談で言ったが俺は右頬を殴られた。

「本当よ！ でもねその子は日本に居るのよ」

俺は頬を擦りながら聞いた。

「それで、日本に行こうと」

「正解」

母さんの顔は満点の笑顔だった。

「待て！ 学校はどうするんだよ。俺はまだ、卒業してないんだぞ」
言い忘れたが俺は16歳で高校一年生だ！ だけどいろいろあつて大学に行っています。

「それにな、日本の高校に行くより。このまま大学を出てから行けばいいじゃないか」

「それはダメよ。それに、大学の方には今日までと連絡入れといったから」

俺は固まった。

「母さんは父さんを泣かしたいのか？」

「大丈夫 さっくんなら泣いて喜んでくれるよ」

それは喜んでない！ 唯のお金が勿体なくて泣くんだよ。

さっくんとは俺の父、姫条佐治莉大企業きじょうだいじりの社長だが母さんのお金の使い方には反発が出来にチキンだ。この家庭の財布かひふを握ってるのは母、姫条由紀きじょうよこどこか常識が抜けている人だ。

「それで、日本に行くのは何時なんだい？」

俺は部屋の中を見ながら、呆れつつ言った。

「今からよ」

そうだと思っただよ！ 部屋の家具が何一つ無いなんて可笑しいよね。

「不幸だあ！」

俺は某魔術師に出てくる男の様に叫んだ。

この日から俺の日常が変わってしまった。そして、あの日を境に俺の中の何かが変わって行った……そう、春風千春との出会いによって。

同時刻日本

「実は千春ちゃんに婚約者がいます」

夕飯の時間に母から告げられた言葉に固まってしまった私。

「何かの冗談ですか」

私は何かの冗談だと思い聞き流そうとしたが

「本当よ、その人達とは学生の時に約束したのよ」「子供が生まれたらその二人を結婚させないと」「したらOKくれたのよ」

なんで簡単に承諾したんだ。

「それでね。近々白皇に通うらしいの」

「それで、私にどうしろと」

「頼んだわね。千春ちゃん」

この日、私の日常が崩壊した。でも、あの日の出来後でこうなるとは思はなかった……そう、姫条悠里との出会いによって。

私（俺）が恋を知るなんて思いもしなかった。

プロローグ（後書き）

後悔はしない、完結まで持っていく！

キャラ設定

名前：姫条 悠里きじょう ゆうり

性別：男

容姿：上の中

好きな物：小説ラノベ、ゲーム、勉強

嫌いな物：自分を嫌な目で見る人、運動

髪の毛は黒、背は170後半だ。

学力が高いため16歳で大学まで行くが母の勝手な理由により辞める。そして日本に渡る。アメリカではその頭脳のせいで友達がない一人で勉強をしている寂しい人間だ。それでも、日本にはたくさんの知人がいる。それは三千院家、愛沢家、鷺ノ宮家、橘家といった人たちと仲がいいが兄的存在として見られている。

恋愛に関しては知識がゼロなので同世代の女子と話をするとテンパってしまう。

頭が良いのは天然な母を見てこうなりたくないと思い勉強を始めると小学生のころには高校並の頭脳になっており、誰もが認める天才だったが本人は天才と言われるのが嫌いだった。自分を見てくる同世代の目は自分を寄せ付けなかった、自分を差別していた。その為、日本ではなく国外で過ごしていたがどこに居ても同じような扱いを受けていた。

出会いは突然

日本について部屋を整理し終わり棚を見てみると何冊かの本が無くなってる事が分かりどうなってるのかはどうでもいいが新作の小説を買うために近くの本屋を探すことにした。

「本屋ってどこにあるんだよ」

俺は日本にはほとんど居なかったため地理などが分からず道に迷っていた。

「こうなったらスマホで検索を」とポケットを探してみたら。

「……ない」

家に忘れてきてしまった。

「はぁ、どうするか」

財布はあるのに携帯を忘れるなんてどうしたんだろうな。

「家に帰ってから行くか」

そう思っただけで家に向かって走り出した俺だったが、曲がり角の所で誰かとぶつかった。

「いて」

「うっ」

俺はそのまま倒れこんでしまった。

「すみません」

頭を掻きながらぶつかった人を見てみると俺と同年の女だった。

「だ、大丈夫ですか」

俺は慌てて立ち上がり押し倒した女性に手を伸ばした。

「大丈夫です」

俺は一安心したが押し倒してしまった罪悪感が残っている。

「どこか、怪我していませんか。頭とかぶつけてませんか？」

俺が心配しながら言ったら女性は驚いた表情をしていた。

「どこも怪我してませんから大丈夫です」

「良かった。怪我していたらと心配してしまい」

「私はこれで」

立ち上がった女性は立ち去ろうとしていた。

「すみませんが近くに本屋さんはありますか。最近こちらに来たばっかりなので教えてくれませんか」

俺はこのまま目的を達成する為に聞いた。

「近くの本屋でいいんですか」

「えっと、出来ればラノベがたくさん置いてる所はあるかな？」

見た目は年上だから普通に話せるが……

「ラノベを読んでものか」

何だか、女性の目が輝いてる。

「そうだね。自分は話す人がいないから本をよく読むんだ」

「だったら、来てくれ」

何だか俺はこの人の何かを焚き付けてしまった訳だ。

「そうだ、見た目は年上だけど。年齢教えてくれるかな」

女性に聞くのは最低の男だがこれが同年ならアウト。

「私は16だが」

はい、ダウトオ！

「お、同年」

ヤバイ、同年と分かった瞬間に緊張してきた。

「君こそ年上じゃないのか」

「いや、お、同年だけど」

テンパってきた。

「どうしたんだ？」

「い、いや、実は俺は同年とあまり話さないからテンパるんだよ」

「よくある、ヘタレキャラだな」

「辞めてくれない！俺はヘタレじゃないから……あれ！」

普通に話せている。

「普通に話せてるじゃないか」

「良かった」

その間に本屋に着いたと思ったらアニメイトだった。

「ここが、アニメイトだったのか」

へえーここが日本のアニメ専門店なのか。

「始めてくるのか」

「ああ、今までアメリカに居たからここは楽しみだ」

多分、俺の目は輝いていると思う。

「嬉しそうだな」

「アメリカと違って日本の本が読めるのはとっても嬉しいんだよ。
日本語の本は中々売ってないからね」

「ヤバイ、俺が知ってない本がたくさんあるよ。さすが日本！ナ
ギが言っていたほどに良い国だな。」

「買った、買った」

「凄い量だな」

俺は紙袋二つ分くらいの本を購入した。

「そんなに本が好きなんだな」

「それぐらいに友達がいないんだよ」

俺の心をえぐる言葉を言わないでほしい。

「そうだ、名前教えてくれないか。俺は姫条悠里」

「私は春風千春です」

趣味に合う人はいいな。

「教えてくれてありがとう」

俺は袋を持って走って帰った。

その夜

「どうしたの悠里君、嬉しそうにして」

「いや、何もないよ」

スープを飲んでいると母が何かを言った

「そうだ、悠里君の婚約者の名前は春風千春ちゃんよ」

俺は盛大にスープを吹いて、ビックリすぎて床に頭を打ち付け
気絶した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5271z/>

意外な人の恋愛

2011年12月18日12時46分発行